ベトナム雑感

大森　海太

ペンクラブＯＢのＳ氏は昨年十二月、ご夫婦で台湾に行かれた。さらに今月末、こんどはベトナム旅行とやら、まことにご盛んなことである。

ベトナムといえば私が最初に訪れたのは今から三十年前。当時南のサイゴン（現ホーチミン）では仏領インドシナの名残りでフランス語の看板やレストランが見られ、お姉さんたちのアオザイ姿が色っぽかった。

いっぽう北部は前漢の武帝以来中国の支配下にあったが、唐末の混乱に乗じて独立を達成し越南（ベトナム）と称して ハノイに都を置いた。私が行ったころのハノイでは一部に漢字が残っており、漆器なども売られていて、どことなく中華の雰囲気が漂っていた。

現在では日本の先端産業の中国に代わる生産拠点として、最新工場が建ち並んでいると聞く。

その後ハノイの南ハイフォン港、さらに十年前の冬、ゴルフ仲間とベトナム戦争の激戦地だった中部のダナンに行き、その近郊や少し北のフエでゴルフを楽しんだ。

このあたりは二世紀末チャム人が後漢の支配から自立して占城（チャンパ）を建国し越南などと抗争を重ねたが、一七世紀末越南の阮朝に征服された。

ダナンの南の港町ホイアンは十六世紀、堺商人などとの交易で栄え、今でも以前の日本人町の名残りがあって（日本橋）、近くの畑の真ん中に日本人谷弥次郎兵衛なる人の墓が残っていた。

そういえばタイのアユタヤには、同じころに山田長政をはじめ千五百人が住む日本人町があったとか。

また十七世紀央（なかば）、厦門（アモイ）を拠点に反清運動を起こした鄭成功（ていせいこう）の父は福建の海賊、母は平戸の日本人だった。彼は日本に援軍を要請したが徳川幕府が応じなかったため、本土を追われて台湾に逃れた（国性爺合戦）。

もしも徳川が鎖国をしなかったら、日本はどんな国になっただろうか。東南アジア各地との関係が進んで人間が混じりあい、もっとコスモポリタンな国になっていたかもしれない。さらに先の大戦で台湾を失わなければなどなど、ヒマにまかせて勝手な想像を廻らせてみるのも愉しいことである。